

p \LaTeX 2 ϵ について

中野 賢 & 日本語 \TeX 開発コミュニティ

作成日：2020/09/28

注意：

p \LaTeX 2 ϵ は、 \LaTeX 2 ϵ を日本語組版用に拡張・調整したものです。この文書では「コミュニティ版 p \LaTeX 2 ϵ 」について簡単に説明します。株式会社アスキーおよび株式会社アスキー・メディアワークスが配布していた p \LaTeX 2 ϵ （以下、「アスキー版 p \LaTeX 2 ϵ 」）とは異なりますので、注意してください。

2010 年以降、アスキー p \TeX ¹は、国際的に広く使われている \TeX Live というディストリビューションに取り込まれ、そこで独自の改良や仕様変更が加えられてきました。最近（2011 年以降）の \TeX Live や W32 \TeX では、p \LaTeX も元々の p \TeX ではなく、その拡張版 ϵ -p \TeX をエンジンに用いるようになっています。また、p \LaTeX のベースである \LaTeX も更新が進められています。

こうした流れにあわせた新しい p \LaTeX として、アスキー版から fork して日本語 \TeX 開発コミュニティ (Japanese \TeX Development Community) が配布しているものが、コミュニティ版 p \LaTeX です。開発中の版は GitHub のリポジトリ²で管理しています。コミュニティ版 p \LaTeX はアスキー版とは異なりますので、バグレポートはアスキー宛てではなく、日本語 \TeX 開発コミュニティに報告してください。 \TeX Forum や GitHub の Issue システムが利用できます。

この文書 (platex.pdf) はコミュニティ版 p \LaTeX の概要を説明したのですが、内容はアスキー版（1995 年頃）からほとんど変わっていませんので、今では歴史的な文書ということにしておきます。最近の p \LaTeX の更新内容は p \LaTeX ニュース（アスキー版：plnews*.pdf、コミュニティ版：plnewsc*.pdf）を参照してください。また、実際の p \LaTeX のソースコードは pldoc.pdf で説明しています。

¹アスキー日本語 p \TeX : <https://asciidwango.github.io/ptex/>

²<https://github.com/texjporg/platex>

1 この文書について

この文書は pL^AT_εX の概要を示していますが、使い方のガイドではありません。pL^AT_εX の機能全般については、[1] を参照してください。また、[2] で説明されていた縦組向けの拡張コマンドについては、pldoc.pdf 中の plect.dtx の項目を参照してください。

日本語の組版処理については、pT_εX (あるいはその前身の「日本語 T_εX」) に関する文献 [3] や [4] (英語), [5] (英語) も併せてご参照ください。

L^AT_εX の機能については、[7] や [9] などを参照してください。新しい機能については usrguide.tex を参照してください。pL^AT_εX のコマンド一覧は「pL^AT_εX チートシート」(platexsheet.pdf) またはその jsclasses 版 (platexsheet-jsclasses.pdf) が参考になるでしょう³。

この文書の構成は次のようになっています。

第 1 節 この節です。この文書についての概要を述べています。

第 2 節 pL^AT_εX で拡張した機能についての概要です。付属のクラスファイルやパッケージファイルについても簡単に説明しています。

第 3 節 現在のバージョンの pL^AT_εX と旧バージョン、あるいは元となっている L^AT_εX との互換性について述べています。

付録 A この文書ソース (platex.dtx) の DOCSTRIP のためのオプションについて述べています。

付録 B pL^AT_εX の dtx ファイルをまとめて、一つのソースコード説明書にするための文書ファイルの説明をしています。

付録 C 付録 B で説明した文書ファイルを処理する sh スクリプト (手順)、DOCSTRIP 文書ファイル内の入れ子の対応を調べる perl スクリプトなどについて説明しています。

2 pL^AT_εX の機能について

pL^AT_εX が提供するファイルは、次の 3 種類に分類することができます。

- フォーマットファイル
- クラスファイル
- パッケージファイル

³両者の PDF とも、コマンドラインで `texdoc -l platexcheat` を実行すると表示されます。

フォーマットファイルには、基本的な機能が定義されており、pL^AT_εE_X 2_ε の核となるファイルです。このファイルに定義されているマクロは、実行時の速度を高めるために、あらかじめ T_EX の内部形式の形で保存されています。

クラスファイルは文書のレイアウトを設定するファイル、パッケージファイルはマクロの拡張を定義するファイルです。前者は `\documentclass` コマンドを用いて読み込み、後者は `\usepackage` コマンドを用いて読み込みます。

古い pL^AT_εE_X 2.09 ユーザへの注意：

クラスファイルとパッケージファイルは、従来、スタイルファイルと呼ばれていたものです。L^AT_εE_X 2_ε ではそれらを、レイアウトに関するものをクラスファイルと呼び、マクロの拡張をするものをパッケージファイルと呼んで区別するようになりました。

2.1 フォーマットファイル

pL^AT_εE_X のフォーマットファイルを作成するには、ソースファイル “`platex.ltx`” を ϵ -pL^AT_εE_X の INI モードで処理します⁴。ただし、T_EX Live や W32T_EX ではこの処理を簡単にする `fmtutil-sys` あるいは `fmtutil` というプログラムが用意されています。以下を実行すれば、フォーマットファイル `platex.fmt` が作成されます。

```
fmtutil-sys --byfmt platex
```

次のリストが、`platex.ltx` の内容です。ただし、このバージョンでは、L^AT_εE_X から pL^AT_εE_X への拡張を `plcore.ltx` をロードすることで行ない、`latex.ltx` には直接、手を加えないようにしています。したがって `platex.ltx` はとても短いものとなっています。`latex.ltx` には L^AT_εE_X のコマンドが、`plcore.ltx` には pL^AT_εE_X で拡張したコマンドが定義されています。

```
1 <*plcore>
```

`latex.ltx` の末尾で使われている `\dump` をいったん無効化します。

```
2 \let\orgdump\dump
```

```
3 \let\dump\relax
```

`latex.ltx` を読み込みます。T_EX Live の標準的インストールでは、この中で Babel 由来のハイフネーション・パターン `hyphen.cfg` が読み込まれるはずですが。

```
4 \input latex.ltx
```

`plcore.ltx` を読み込みます。

```
5 \typeout{*****~^J%
```

```
6     *~^J%
```

```
7     * making pLaTeX format~^J%
```

⁴2016 年以前は pL^AT_εE_X と ϵ -pL^AT_εE_X のどちらでもフォーマットを作成することができましたが、2017 年に L^AT_εE_X が ϵ -T_EX 必須となったことに伴い、pL^AT_εE_X も ϵ -pL^AT_εE_X が必須となりました。

```

8      *^^J%
9      *****}
10 \makeatletter
11 \input plcore.ltx

```

フォント関連のデフォルト設定ファイルである、pldefs.ltxを読み込みます。T_EXの入力ファイル検索パスに設定されているディレクトリにpldefs.cfgファイルがある場合は、そのファイルを使います。読み込み後にコードが実行されるかもしれません。

```

12 \InputIfFileExists{pldefs.cfg}
13     {\typeout{*****^^J%
14              * Local config file pldefs.cfg used^^J%
15              *****}}%
16     {\input{pldefs.ltx}}
17 \ifx\code@after@pldefs\@undefined\else \code@after@pldefs \fi

```

以前のバージョンでは、フォーマット作成時にpL_AT_EXのバージョンがわかるように、端末に表示していましたが、\everyjobにバナー表示以外のコードが含まれる可能性を考慮し、安全のためやめました。

```
18 %\the\everyjob
```

pL_AT_EX 2_εの起動時にplatex.cfgがある場合、それを読み込むようにします。バージョン2016/07/01ではコードをplcore.ltxに入れていましたが、platex.ltxへ移動しました。

```

19 \everyjob\expandafter{%
20   \the\everyjob
21   \IfFileExists{platex.cfg}{%
22     \typeout{*****^^J%
23             * Loading platex.cfg.^^J%
24             *****}}%
25   \input{platex.cfg}}{%
26 }

```

フォーマットファイルにダンプします。

```

27 \let\dump\orgdump
28 \let\orgdump\@undefined
29 \makeatother
30 \dump
31 %\endinput
32 </plcore>

```

実際にpL_AT_EX 2_εへの拡張を行なっているplcore.ltxは、DOCSTRIPプログラムによって、次のファイルの断片が連結されたものです。

- plvers.dtx は、pL_AT_EX 2_εのフォーマットバージョンを定義しています。
- plfonts.dtx は、NFSS2を拡張しています。

- `plcore.dtx` は、上記以外のコマンドでフォーマットファイルに格納されるコマンドを定義しています。

また、プリロードフォントや組版パラメータなどのデフォルト設定は、`platex.ltx` の中で `pldefs.ltx` をロードすることにより行います⁵。このファイル `pldefs.ltx` も `plfonts.dtx` から生成されます。

注意：

このファイルに記述されている設定を変更すれば $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}_{2\epsilon}$ をカスタマイズすることができますが、その場合は `pldefs.ltx` を直接修正するのではなく、いったん `pldefs.cfg` という名前でコピーして、そのファイルを編集してください。フォーマット作成時に `pldefs.cfg` が存在した場合は、そちらが `pldefs.ltx` の代わりに読み込まれます。

2.1.1 バージョン

$\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}_{2\epsilon}$ のバージョンやフォーマットファイル名は、`plvers.dtx` で定義しています。

2.1.2 NFSS2 コマンド

$\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}_{2\epsilon}$ では、フォント選択機構として NFSS2 を用いています。 $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}_{2\epsilon}$ では、オリジナルの NFSS2 と同様のインターフェイスで、和文フォントを選択できるように、`plfonts.dtx` で NFSS2 を拡張しています。

$\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}_{2\epsilon}$ の NFSS2 は、フォントを切替えるコマンドを指定するときに、それが欧文書体か和文書体のいずれかを対象とするものかを、できるだけ意識しないようにする方向で拡張しています。いいかえれば、コマンドが（可能な限りの）判断をします。したがって数多くある英語版のクラスファイルやパッケージファイルなどで書体の変更を行っている箇所を修正する必要はあまりありません。

NFSS2 についての詳細は、 $\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}_{2\epsilon}$ に付属の `fntguide.tex` を参照してください。

2.1.3 出カルーチンとフロート

`plcore.dtx` は、次の項目に関するコマンドを日本語処理用に修正や拡張をしています。

- プリアンブルコマンド
- 改ページ

⁵アスキー版では `plcore.ltx` の中でロードしていましたが、2018 年以降の新しいコミュニティ版 $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ では `platex.ltx` から読み込むことにしました。

- 改行
- オブジェクトの出力順序
- トンボ
- 脚注マクロ
- 相互参照
- 疑似タイプ入力

2.2 クラスファイルとパッケージファイル

pL^AT_εX が提供をするクラスファイルやパッケージファイルは、オリジナルのファイルに基づいています。

pL^AT_εX に付属のクラスファイルは、次のとおりです。

- jarticle.cls, jbook.cls, jreport.cls
横組用の標準クラスファイル。jclasses.dtx から作成される。
- tarticle.cls, tbook.cls, treport.cls
縦組用の標準クラスファイル。jclasses.dtx から作成される。
- jltxdoc.cls
日本語の.dtx ファイルを組版するためのクラスファイル。jltxdoc.dtx から作成される。

また、pL^AT_εX に付属のパッケージファイルは、次のとおりです。

- plect.sty
縦組用の拡張コマンドなどが定義されているファイル。plext.dtx から作成される。
- ptrace.sty
L^AT_εX でフォント選択コマンドのトレースに使う tracefnt.sty が再定義してしまう NFSS2 コマンドを、pL^AT_εX 用に再々定義するためのパッケージ。plfonts.dtx から作成される。

- `pftrace.sty`

`LATEX` でフロート関連コマンドのトレースに使う `fltrace.sty`⁶が再定義してしまうコマンドを、`pLATEX 2ε`用に再々定義するためのパッケージ。`plcore.dtx`から作成される。

- `oldpfont.sty`

`pLATEX 2.09`のフォントコマンドを提供するパッケージ。`pl209.dtx`から作成される。

なお、以前のバージョンに同梱していた `ascmac` パッケージと `nidanfloat` パッケージは、別のバンドルとして独立させました。

3 他のフォーマット・旧バージョンとの互換性

ここでは、この `pLATEX 2ε` のバージョンと以前のバージョン、あるいは `LATEX 2ε` との互換性について説明をしています。

3.1 `LATEX 2ε` との互換性

`pLATEX 2ε` は、`LATEX 2ε` の上位互換という形を取っていますが、いくつかの命令の定義やパラメータなども変更しています。したがって英文書など、`LATEX 2ε`でも処理できるファイルを `pLATEX 2ε` で処理しても、完全に同じ結果になるとは限りません。

`LATEX 2ε` 向けに書かれた多くのクラスファイルやパッケージファイルは、そのまま使えると思います。ただし、それらが `pLATEX 2ε` で拡張しているコマンドと同じ名前のコマンドを再定義している場合は、その拡張の仕方によってはエラーになることもあります。用いようとしているクラスファイルやパッケージファイルがうまく動くかどうかを、完全に確かめる方法は残念ながらありません。一番簡単なのは、動かしてみることです。不幸にもうまく動かない場合は、ログファイルや付属の文書ファイルを参考に原因を調べてください。

なお、いくつかの `LATEX` パッケージについては、`pLATEX` 向けのパッチが用意されています。その一覧は、`plautopatch` パッケージ (Hironobu Yamashita 作) のドキュメント (日本語版は `plautopatch-ja.pdf`) に記載されています。

3.2 `pLATEX 2.09` との互換性

`pLATEX 2ε` では、文書が使用するクラスを、プリアンブルで `\documentclass` コマンドにより指定します。ここで `\documentclass` の代わりに `\documentstyle` を

⁶`LATEX 2ε` 2014/05/01 で追加されました。参考：`LATEX 2ε` News Issue 21 (`ltnews21.tex`)

用いると、pL^AT_εE_X 2.09 は自動的に 2.09 互換モードに入ります。これは L^AT_εE_X 2.09 が L^AT_εE_X 2.09 互換モードに入ると同様に、互換モードは古い文書を組版するためだけに作られています。新しく文書を作成する場合は、`\documentclass` コマンドを用いてください。

互換モードでは (p)L^AT_εE_X 2.09 の新しい機能を利用できず、また古いネイティブな pL^AT_εE_X 2.09 環境と微妙に異なる結果になる可能性もあるという点は、英語版の L^AT_εE_X 2.09 でも同じです。詳細は、L^AT_εE_X 2.09 に付属の `usrguide.tex` を参照してください。

3.3 latexrelease パッケージへの対応

L^AT_εE_X <2015/01/01>で導入された latexrelease パッケージをもとに、新しい pL^AT_εE_X では platexrelease パッケージを用意しました。platexrelease パッケージを用いると、過去の pL^AT_εE_X をエミュレートしたり、フォーマットを作り直すことなく新しい pL^AT_εE_X を試したりすることができます。詳細は platexrelease のドキュメントを参照してください。

A DOCSTRIP プログラムのためのオプション

この文書のソース (`platex.dtx`) を DOCSTRIP プログラムで処理することによって、いくつかの異なるファイルを生成することができます。DOCSTRIP プログラムの詳細は、`docstrip.dtx` を参照してください。

この文書の DOCSTRIP プログラムのためのオプションは、次のとおりです。

| オプション | 意味 |
|---------------------|--|
| <code>plcore</code> | フォーマットファイルを作るためのファイルを生成 |
| <code>pldoc</code> | pL ^A T _ε E _X 2.09 のソースファイルをまとめて組版するための文書ファイル (<code>pldoc.tex</code>) を生成 |
| <code>shprog</code> | 上記のファイルを作成するための sh スクリプトを生成 |
| <code>plprog</code> | 入れ子構造を調べる簡単な perl スクリプトを生成 |
| <code>Xins</code> | 上記の sh スクリプトや perl スクリプトを取り出すための DOCSTRIP バッチファイル (<code>Xins.ins</code>) を生成 |

A.1 ファイルの取り出し方

たとえば、この文書の “`plcore`” の部分を “`platex.ltx`” というファイルにするときの手順はつぎのようになります。

1. latex docstrip
2. 入力ファイルの拡張子 (dtx) を入力する。
3. 出力ファイルの拡張子 (ltx) を入力する。
4. DOCSTRIP オプション (plcore) を入力する。
5. 入力ファイル名 (latex) を入力する。
6. latex.ltx が存在する場合は、確認を求めてくるので、“y” を入力する。
7. 別の処理を行なうかを問われるので、“n” を入力する。

これで、latex.ltx が作られます。

あるいは、次のような内容のファイル fmt.ins を作成し、latex fmt.ins することでも latex.ltx を作成することができます。

```
\def\batchfile{fmt.ins}
\input docstrip.tex
\generateFile[latex.ltx]{t}{\from[latex.dtx]{plcore}}
```

B 文書ファイル

ここでは、このパッケージに含まれている dtx ファイルをまとめて組版し、ソースコード説明書を得るための文書ファイル pldoc.tex について説明をしています。個別に処理した場合と異なり、変更履歴や索引も付きます。全体で、およそ 200 ページ程度になります。

デフォルトではソースコードの説明が日本語で書かれます。もし英語の説明書を読みたい場合は、

```
\newif\ifJAPANESE
```

という内容の latex.cfg を予め用意してから pldoc.tex を処理してください (2016 年 7 月 1 日以降のコミュニティ版 pL^AT_EX 2_ε が必要)。

filecontents 環境は、引数に指定されたファイルが存在するときは何もしませんが、存在しないときは、環境内の内容でファイルを作成します。pldoc.dic ファイルは、mendex プログラムで索引を処理するときに \西暦、\和暦に対する「読み」を付けるために必要です。

```
33 \*pldoc)
34 \begin{filecontents}{pldoc.dic}
35 西暦    せいき
36 和暦    われき
37 \end{filecontents}
```

文書クラスには、jltxdoc クラスを用います。plext.dtx の中でサンプルを組み立てていますので、plext パッケージが必要です。

```
38 \documentclass{jltxdoc}
39 \usepackage{plext}
40 \listfiles
41
```

いくつかの T_EX プリミティブと plain T_EX コマンドを索引に出力しないようにします。

```
42 \DoNotIndex{\def,\long,\edef,\xdef,\gdef,\let,\global}
43 \DoNotIndex{\if,\ifnum,\ifdim,\ifcat,\ifmmode,\ifvmode,\ifhmode,%
44             \iftrue,\iffalse,\ifvoid,\ifx,\ifeof,\ifcase,\else,\or,\fi}
45 \DoNotIndex{\box,\copy,\setbox,\unvbox,\unhbox,\hbox,%
46             \vbox,\vtop,\vcenter}
47 \DoNotIndex{\@empty,\immediate,\write}
48 \DoNotIndex{\egroup,\bgroup,\expandafter,\begingroup,\endgroup}
49 \DoNotIndex{\divide,\advance,\multiply,\count,\dimen}
50 \DoNotIndex{\relax,\space,\string}
51 \DoNotIndex{\csname,\endcsname,\@spaces,\openin,\openout,%
52             \closein,\closeout}
53 \DoNotIndex{\catcode,\endinput}
54 \DoNotIndex{\jobname,\message,\read,\the,\m@ne,\noexpand}
55 \DoNotIndex{\hspace,\hspace,\hspace,\hspace,\hspace,\hspace,\hspace,\hspace,%
56             \z@,\z@skip,\@one,\tw@,\p@,\@minus,\@plus}
57 \DoNotIndex{\dp,\wd,\ht,\setlength,\addtolength}
58 \DoNotIndex{\newcommand,\renewcommand}
59
```

索引と変更履歴の見出しに \part を用いるように設定をします。

```
60 \ifJAPANESE
61 \IndexPrologue{\part*{索引}}%
62             \markboth{索引}{索引}%
63             \addcontentsline{toc}{part}{索引}%
64 イタリアック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。
65 下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。
66 その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。}
67 \else
68 \IndexPrologue{\part*{Index}}%
69             \markboth{Index}{Index}%
70             \addcontentsline{toc}{part}{Index}%
71 The italic numbers denote the pages where the corresponding entry
72 is described, numbers underlined point to the definition,
73 all others indicate the places where it is used.}
74 \fi
75 %
76 \ifJAPANESE
77 \GlossaryPrologue{\part*{変更履歴}}%
78             \markboth{変更履歴}{変更履歴}%
79             \addcontentsline{toc}{part}{変更履歴}}
```

```

80 \else
81 \GlossaryPrologue{\part*{Change History}}%
82         \markboth{Change History}{Change History}%
83         \addcontentsline{toc}{part}{Change History}}
84 \fi
85

```

標準の `\changes` コマンドを、複数ファイルの文書に合うように修正しています。

```

86 \makeatletter
87 \def\changes@#1#2#3{%
88   \let\protect\@unexpandable\protect
89   \edef\@tempa{\noexpand\glossary{#2\space
90             \currentfile\space#1\levelchar
91             \ifx\saved@macroname\@empty
92               \space\actualchar\generalname
93             \else
94               \expandafter\@gobble
95               \saved@macroname\actualchar
96               \string\verb\quotechar*%
97               \verbatimchar\saved@macroname
98               \verbatimchar
99             \fi
100             :\levelchar #3}}%
101   \@tempa\endgroup\@esphack}

```

コード行では、少しの Overfull を警告無しに許容します。

```

102 \renewcommand*{\MacroFont{\fontencoding\encodingdefault
103         \fontfamily\ttdefault
104         \fontseries\mddefault
105         \fontshape\updefault
106         \small
107         \hfuzz 6pt\relax}

```

章番号の桁数が多い場合を考慮し、目次でのスペースを少し増やします。

```

108 \renewcommand*{\l@section{\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.8em}}
109 \renewcommand*{\l@subsubsection{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.4em}}
110 \makeatother

```

変更履歴と 2 段組の索引を作成します。

```

111 \RecordChanges
112 \CodelineIndex
113 \EnableCrossrefs
114 \setcounter{IndexColumns}{2}
115 \settowidth\MacroIndent{\ttfamily\scriptsize 000\ }

```

この文書のタイトル・著者・日付を設定します。

```

116 \title{The \pLaTeXe\ Sources}
117 \author{Ken Nakano \& Japanese \TeX\ Development Community}
118
119 % Get the date and patch level from plvers.dtx

```

```

120 \makeatletter
121 \let\patchdate=\@empty
122 \begingroup
123   \def\ProvidesFile#1\pfmtversion#2#3\ppatch@level#4{%
124     \date{#2}\xdef\patchdate{#4}\endinput}
125   \input{plvers.dtx}
126 \endgroup
127
128 % Add the patch version if available.
129 \def\Xpatch{0}
130 \ifx\patchdate\Xpatch\else
131 % number is assumed
132 \ifnum\patchdate>0
133   \edef\@date{\@date\space Patch level\space\patchdate}
134 \else
135   \edef\@date{\@date\space Pre-Release\patchdate}
136 \fi\fi
137
138 % Add the last update info, in case format date unchanged
139 % Note: \@ifl@t@r can be used only in preamble.
140 \def\lastupd@te{0000/00/00}
141 \begingroup
142   \def\ProvidesFile#1[#2 #3]{%
143     \def\@tempd@te{#2}\endinput
144     \@ifl@t@r{\@tempd@te}{\lastupd@te}{%
145       \global\let\lastupd@te\@tempd@te
146     }{}}
147   \let\ProvidesClass\ProvidesFile
148   \let\ProvidesPackage\ProvidesFile
149   \input{plvers.dtx}
150   \input{plexpl3.dtx}
151   \input{plfonts.dtx}
152   \input{plcore.dtx}
153   \input{plexpt.dtx}
154   \input{pl209.dtx}
155   \input{kinsoku.dtx}
156   \input{jclasses.dtx}
157   \input{jltxdoc.cls}
158 \endgroup
159 \@ifl@t@r{\lastupd@te}{\pfmtversion}{%
160   \edef\@date{\@date\break (last updated: \lastupd@te)}%
161 }{}
162 \makeatother

```

ここからが本文ページとなります。

```

163 \begin{document}
164 \pagenumbering{roman}
165 \maketitle
166 \renewcommand\maketitle{}
167 \tableofcontents

```

```

168 \clearpage
169 \pagenumbering{arabic}
170
171 \DocInclude{plvers} % pLaTeX version
172
173 \DocInclude{plexpl3} % additions to expl3
174
175 \DocInclude{plfonts} % NFSS2 commands
176
177 \DocInclude{plcore} % kernel commands
178
179 \DocInclude{plext} % external commands
180
181 \DocInclude{pl209} % 2.09 compatibility mode commands
182
183 \DocInclude{kingsoku} % kingsoku parameter
184
185 \DocInclude{jclasses} % Standard class
186
187 \DocInclude{jltxdoc} % dtx documents class
188

```

ltxdoc.cfg に \AtEndOfClass{\OnlyDescription}が指定されている場合は、ここで終了します。

```

189 \StopEventually{\end{document}}
190

```

変更履歴と索引を組版します。変更履歴ファイルと索引の作り方の詳細については、おまけ C.1 を参照してください。

```

191 \clearpage
192 \pagestyle{headings}
193 % Make TeX shut up.
194 \hbadness=10000
195 \newcount\hbadness
196 \hfuzz=\maxdimen
197 %
198 \PrintChanges
199 \clearpage
200 %
201 \begingroup
202 \def\endash{--}
203 \catcode'\-\active
204 \def-\{\futurelet\temp\indexdash}
205 \def\indexdash{\ifx\temp-\endash\fi}
206
207 \PrintIndex
208 \endgroup

```

ltxdoc.cfg に 2 度目の \PrintIndex が指定されているかもしれません。そこ

で、最後に、変更履歴や索引が2度組版されないように `\PrintChanges` および `\PrintIndex` コマンドを何も実行しないようにします。

```
209 \let\PrintChanges\relax
210 \let\PrintIndex\relax
211 \end{document}
212 \pdoc)
```

C おまけプログラム

C.1 シェルスクリプト `mkpdoc.sh`

$\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ のマクロ定義ファイルをまとめて組版し、変更履歴と索引も付けるときに便利なシェルスクリプトです。このシェルスクリプト⁷の使用方法は次のとおりです。

```
sh mkpdoc.sh
```

C.1.1 `mkpdoc.sh` の内容

まず、以前に `pdoc.tex` を処理したときに作成された、目次ファイルや索引ファイルなどを削除します。

```
213 (*shprog)
214 (ja)rm -f pdoc.toc pdoc.idx pdoc.glo
215 (en)rm -f pdoc-en.toc pdoc-en.idx pdoc-en.glo
```

そして、`ltxdoc.cfg` を空にします。このファイルは、`jltxdoc.cls` の定義を変更するものですが、ここでは、変更されたくありません。

```
216 echo "" > ltxdoc.cfg
```

そして、`pdoc.tex` を処理します。

```
217 (ja)platex pdoc.tex
218 (en)platex -jobname=pdoc-en pdoc.tex
```

索引と変更履歴を作成します。このスクリプトでは、変更履歴や索引を生成するのに `mendex` プログラムを用いています。`mendex` は `makeindex` の上位互換のファイル整形コマンドで、索引語の読みを自動的に付けるなどの機能があります。

`-s` オプションは、索引ファイルを整形するためのスタイルオプションです。索引用の `gind.ist` と変更履歴用の `gglo.ist` は、 \LaTeX のディストリビューションに付属しています。

`-o` は、出力するファイル名を指定するオプションです。

⁷このシェルスクリプトは UNIX 用です。しかし `rm` コマンドを `delete` コマンドにするなどすれば、簡単に DOS などのバッチファイルに修正することができます。

-f は、項目に“読み”がなくてもエラーとしないオプションです。makeindex コマンドには、このオプションがありません。

```
219 <ja>mendex -s gind.ist -d pldoc.dic -o pldoc.ind pldoc.idx
220 <en>mendex -s gind.ist -d pldoc.dic -o pldoc-en.ind pldoc-en.idx
221 <ja>mendex -f -s gglo.ist -o pldoc.gls pldoc.glo
222 <en>mendex -f -s gglo.ist -o pldoc-en.gls pldoc-en.glo
```

ltxdoc.cfg の内容を \includeonly{} にし、pldoc.tex を処理します。このコマンドは、引数に指定されたファイルだけを“\include”するためのコマンドですが、ここでは何も \include したくないので、引数には何も指定をしません。しかし、\input で指定されているファイルは読み込まれます。したがって、目次や索引や変更履歴のファイルが処理されます。この処理は、主に、これらでエラーが出るかどうかの確認です。

```
223 echo "\includeonly{}" > ltxdoc.cfg
224 <ja>platex pldoc.tex
225 <en>platex -jobname=pldoc-en pldoc.tex
```

最後に、再び ltxdoc.cfg を空にして、pldoc.tex を処理をします。本文を 1 ページから開始していますので、この後、もう一度処理をする必要はありません。

```
226 echo "" > ltxdoc.cfg
227 <ja>platex pldoc.tex
228 <en>platex -jobname=pldoc-en pldoc.tex
229 # EOT
230 </shprog>
```

C.2 Perl スクリプト dstcheck.pl

DOCSTRIP 文書ファイルは、L^AT_EX のソースとその文書を同時に管理する方法として、とてもすぐれていると思います。しかし、たとえば jclasses.dtx のように、条件が多くなると、入れ子構造がわからなくなってしまうがちです。L^AT_EX で処理すれば、エラーによってわかりますが、文書ファイルが大きくなると面倒です。

ここでは、DOCSTRIP 文書ファイルの入れ子構造を調べるのに便利な、perl スクリプトについて説明をしています。

この perl スクリプトの使用方法は次のとおりです。

```
perl dstcheck.pl <file-name>
```

C.2.1 dstcheck.pl の内容

最初に、この perl スクリプトが何をするのかを簡単に記述したコメントを付けます。

```
231 <*plprog>
232 ##
233 ## DOCSTRIP 文書内の環境や条件の入れ子を調べる perl スクリプト
234 ##
```

このスクリプトは、入れ子の対応を調べるために、次のスタックを用います。〈条件〉あるいは〈環境〉を開始するコードが現れたときに、それらはスタックにプッシュされ、終了するコードでポップされます。したがって、現在の〈条件〉あるいは〈環境〉と、スタックから取り出した〈条件〉あるいは〈環境〉と一致すれば、対応が取れているといえます。そうでなければエラーです。

@dst スタックには、〈条件〉が入ります。条件の開始は、“%<*(条件)>”です。条件の終了は、“%/<(条件)>”です。〈条件〉には、>文字が含まれません。@env スタックには、〈環境〉が入ります。

先頭を明示的に示すために、ダミーの値を初期値として用います。スタックは、〈条件〉あるいは〈環境〉の名前と、その行番号をペアにして操作をします。

```
235 push(@dst, "DUMMY"); push(@dst, "000");
236 push(@env, "DUMMY"); push(@env, "000");
```

この while ループの中のスクリプトは、文書ファイルの 1 行ごとに実行をします。

```
237 while (<>) {
```

入力行が条件を開始する行なのかを調べます。条件の開始行ならば、@dst スタックに〈条件〉と行番号をプッシュします。

```
238 if (/^%<\*([^\>]+)>/) { # check conditions
239     push(@dst, $1);
240     push(@dst, $.);
```

そうでなければ、条件の終了行なのかを調べます。現在行が条件の終了を示している場合は、@dst スタックをポップします。

```
241 } elsif (/^%<\/([^\>]+)>/) {
242     $linenum = pop(@dst);
243     $conditions = pop(@dst);
```

現在行の〈条件〉と、スタックから取り出した〈条件〉が一致しない場合、その旨のメッセージを出力します。

なお、DUMMY と一致した場合は、一番外側のループが合っていないことを示しています。このとき、これらのダミー値をスタックに戻します。いつでもスタックの先頭をダミー値にするためです。

```
244     if ($1 ne $conditions) {
245         if ($conditions eq "DUMMY") {
246             print "$ARGV: '</$1>' (l.$.) is not started.\n";
247             push(@dst, "DUMMY");
248             push(@dst, "000");
249         } else {
250             print "$ARGV: '<*$conditions>' (l.$linenum) is ended ";
251             print "by '<*$1>' (l.$.)\n";
252         }
253     }
254 }
```


環境の入れ子も条件と同じように調べます。

verbatim 環境のときに、その内側をスキップしていることに注意をしてください。

```
255 if (/^% *\\begin\\{verbatim\\}/) { # check environments
256     while(<>) {
257         last if (/^% *\\end\\{verbatim\\}/);
258     }
259 } elsif (/^% *\\begin\\{([^{]+)\\}\\{(.*)\\}/) {
260     push(@env,$1);
261     push(@env,$.);
262 } elsif (/^% *\\begin\\{([^{]+)\\}/) {
263     push(@env,$1);
264     push(@env,$.);
265 } elsif (/^% *\\end\\{([^{]+)\\}/) {
266     $linenum = pop(@env);
267     $environment = pop(@env);
268     if ($1 ne $environment) {
269         if ($environment eq "DUMMY") {
270             print "$ARGV: '\\end{$1}' (l.$.) is not started.\n";
271             push(@env,"DUMMY");
272             push(@env,"000");
273         } else {
274             print "$ARGV: \\begin{$environment} (l.$linenum) is ended ";
275             print "by \\end{$1} (l.$.)\n";
276         }
277     }
278 }
```

ここまでが、最初の while ループです。

```
279 }
```

文書ファイルを読み込んだ後、終了していない条件があるかどうかを確認します。すべての条件の対応がとれていれば、この時点での@dst スタックにはダミー値しか入っていません。したがって、対応が取れている場合は、最初の2つのポップによって、ダミー値が設定されます。ダミー値でなければ、ダミー値になるまで、取り出した値を出力します。

```
280 $linenum = pop(@dst);
281 $conditions = pop(@dst);
282 while ($conditions ne "DUMMY") {
283     print "$ARGV: '<*$conditions>' (l.$linenum) is not ended.\n";
284     $linenum = pop(@dst);
285     $conditions = pop(@dst);
286 }
```

環境の入れ子についても、条件の入れ子と同様に確認をします。

```
287 $linenum = pop(@env);
288 $environment = pop(@env);
289 while ($environment ne "DUMMY") {
290     print "$ARGV: '\\begin{$environment}' (l.$linenum) is not ended.\n";
```

```

291   $linenum = pop(@env);
292   $environment = pop(@env);
293 }
294 exit;
295 </plprog>

```

C.3 DOCSTRIP バッチファイル

ここでは、付録 C.1 と付録 C.2 で説明をした二つのスクリプトを、このファイルから取り出すための DOCSTRIP バッチファイルについて説明をしています。

まず、DOCSTRIP パッケージをロードします。また、実行経過のメッセージを出力しないようにしています。

```

296 <*Xins>
297 \input docstrip
298 \keepsilent

```

DOCSTRIP プログラムは、連続する二つのパーセント記号 (%%) ではじまる行をメタコメントとみなし、条件によらず出力をします。しかし、“%” は \TeX ではコメントであっても、sh や perl にとってはコメントではありません。そこで、メタコメントとして出力する文字を “##” と変更します。

```

299 {\catcode'#=12 \gdef\MetaPrefix{## }}

```

そして、プリアンブルに出力されるメッセージを宣言します。ここでは、とくに何も指定していませんが、宣言をしないとデフォルトの記述が ‘%%’ 付きで出力されてしまうため、それを抑制する目的で使用しています。

```

300 \declarepreamble\thispre
301 \endpreamble
302 \usepreamble\thispre

```

ポストアンブルも同様に、宣言をしないと ‘\endinput’ が出力されます。

```

303 \declarepostamble\thispost
304 \endpostamble
305 \usepostamble\thispost

```

`\generate` コマンドで、どのファイルに、どのファイルのどの部分を出力するのかを指定します。

```

306 \generate{
307   \file{dstcheck.pl}{\from{platex.dtx}{plprog}}
308   \file{mkpldoc.sh}{\from{platex.dtx}{shprog,ja}}
309   \file{mkpldoc-en.sh}{\from{platex.dtx}{shprog,en}}
310 }
311 \endbatchfile
312 </Xins>

```

参考文献

- [1] 中野 賢 『日本語 L^AT_EX 2_ε ブック』 アスキー, 1996.
- [2] インプレス・ラボ監修, アスキー書籍編集部編 『縦組対応 パーソナル日本語 T_EX』 アスキー出版局, 1994
- [3] アスキー出版技術部責任編集 『日本語 T_EX テクニカルブック I』 アスキー, 1990.
- [4] Haruhiko Okumura, pT_EX and Japanese Typesetting The Asian Journal of T_EX, Volume 2, No. 1, 2008.
(<http://ajt.ktug.org/2008/0201okumura.pdf>)
- [5] Hisato Hamano, Vertical Typesetting with T_EX. TUGboat issue 11:3, 1990.
(<https://tug.org/TUGboat/tb11-3/tb29hamano.pdf>)
- [6] Donald E. Knuth. “*The T_EXbook*”. Addison-Wesley, 1984. (邦訳：斎藤信男監修, 鷺谷好輝訳, T_EX ブック 改訂新版, アスキー出版局, 1989)
- [7] Laslie Lamport. “*L^AT_EX: A Document Preparation System*”. Addison-Wesley, second edition, 1994.
- [8] Laslie Lamport. “*L^AT_EX: A Document Preparation System*”. Addison-Wesley, 1986. (邦訳：倉沢良一監修, 大野俊治・小暮博通・藤浦はる美訳, 文書処理システム L^AT_EX, アスキー, 1990)
- [9] Michel Goossens, Frank Mittelbach, Alexander Samarin. “*The L^AT_EX Companion*”. Addison-Wesley, 1994.
- [10] 河野 真治 『入門 Perl』 アスキー出版局, 1994

変更履歴

| | |
|---|--|
| 1995/05/08 v1.0 | 2016/08/26 v1.0m |
| ・最初のバージョン 2 | ・ <code>platex.cfg</code> の読み込みを |
| 1995/08/25 v1.0a | <code>plcore.ltx</code> から <code>platex.ltx</code> へ |
| ・互換性について、DOCSTRIP の使 | 移動 4 |
| い方、参考文献を追加 2 | 2016/09/14 v1.0n |
| 1996/02/01 v1.0b | ・ \LaTeX のバナーの保存しかたを改良 3 |
| ・ <code>omake-sh.ins</code> , <code>omake-pl.ins</code> を | 2017/09/24 v1.0o |
| DOCSTRIP の変更にもなう変更 | ・パッチレベルが負の数の場合を |
| をした 18 | pre-release 扱いへ 11 |
| 1997/01/23 v1.0c | 2017/11/11 v1.0p |
| ・DOCSTRIP にもなう変更 18 | ・ \LaTeX のバナーを保存するコード |
| ・ <code>gind.ist</code> と <code>gglo.ist</code> を | を <code>platex.ltx</code> から <code>plcore.ltx</code> |
| <code>\$TEXMF/tex/latex2e/base</code> | へ移動 3 |
| ディレクトリからコピーしない | 2017/11/29 v1.0q |
| ようにした 14 | ・英語版ドキュメントを追加 1 |
| 1997/01/25 v1.0c | 2017/12/02 v1.0r |
| ・ <code>pldoc.dic</code> を <code>filecontents</code> 環境によ | ・英語の参考文献も追加 2 |
| り作成 9 | 2017/12/05 v1.0s |
| 1997/01/29 v1.0c | ・デフォルト設定ファイルの読み込 |
| ・ <code>pltpatch.ltx</code> を <code>plpatch.ltx</code> に | みを <code>plcore.ltx</code> から |
| 名称変更 11 | <code>platex.ltx</code> へ移動 4 |
| 2016/01/27 v1.0d | 2018/02/07 v1.0t |
| ・ $\LaTeX 2_{\epsilon}$ に付属するファイルの | ・ <code>ascmac</code> パッケージを独立させた . 7 |
| 説明を更新 6 | 2018/02/18 v1.0u |
| ・ <code>rm</code> コマンド実行前に存在確認する | ・ <code>nidanfloat</code> パッケージを独立させた 7 |
| ようにした 14 | 2018/04/06 v1.0v |
| 2016/02/16 v1.0e | ・最新の <code>source2e</code> への追随 11 |
| ・ <code>platexrelease</code> の説明を追加 8 | 2018/04/08 v1.0w |
| 2016/04/12 v1.0f | ・安全のためフォーマット作成時の |
| ・ドキュメントを更新 1 | バナー表示をやめた 4 |
| 2016/05/07 v1.0g | 2018/09/03 v1.0x |
| ・フォーマット作成時に \LaTeX のバ | ・ <code>platexcheat</code> に言及 2 |
| ナーを一旦保存 3 | ・ <code>plautopatch</code> に言及 7 |
| 2016/05/08 v1.0h | ・ドキュメントを更新 1 |
| ・ドキュメントから <code>plpatch.ltx</code> を | 2018/09/22 v1.0y |
| 除外 11 | ・最終更新日を <code>pldoc.pdf</code> に表示 11 |
| 2016/05/12 v1.0i | 2019/09/29 v1.0z |
| ・一時コマンド <code>\orgdump</code> を最終的 | ・タイポ修正 1 |
| に未定義へ 4 | 2020/03/24 v1.1 |
| 2016/05/20 v1.0j | ・ドキュメントを更新 1 |
| ・ <code>plftrace</code> の説明を追加 6 | 2020/09/26 v1.1a |
| 2016/05/21 v1.0k | ・ <code>plexpl3.dtx</code> を追加 12 |
| ・変更履歴も出力するようにした . . 1 | 2020/09/28 v1.1b |
| 2016/06/19 v1.0l | ・ <code>defs</code> 読込後にフック追加 4 |
| ・パッチレベルを <code>plvers.dtx</code> から | |
| 取得 11 | |